

リカアドオ理論における

貿易による搾取の問題

井 上 次 郎

一、問題の所在

リカアドオ貿易論は、正統学派貿易論の枢軸をなすものであり、而もこの正統学派貿易論は、同学派の数多い経済理論のうちで最も有力な理論の一つとなつてゐることは、既に周く人の知るところである。

併しながら、リカアドオの著書は、難解を以て世に著聞している。従つて、リカアドオ経済学に関する解説も、正鵠を得ていると云い難いものが甚だ多い。彼の貿易論についての解釈とても、全くその例外をなすものではない。
5。

これまでは、外国貿易による利益は、貿易当事国の双方によつて享受されると見るのがリカアドオの理論である、という風に説かれて来た。かように解釈する人達は、貿易による搾取というようなことは、リカアドオの理論では全く問題となり得ない事柄であつて、この問題の展開は、マルクスによつて始めて成し就げられたもので

ある、と考ふる。これが、大体において、今までの通説であつたといつてよいであろう。

尤も、この見解に対して、異議を狭む者がないではない。だが、それとても、リカアドオの理論からして、一時的・過渡的に、搾取關係の成立する場合のあり得ることを指摘するにとどまる程度のものである。

何れにもせよ、はたしてこれが、一体、正しいリカアドオ理論の解釈であろうか。小論において、わたくしは、この問題を問題としてみたいと思う。

二、価値以上の輸出

リカアドオは、國際貿易の利益の性質に関する問題を、財貨の数量増加の問題、消費者の享樂する効用増加の問題として取扱つているといわれている。

彼がその有名な貿易論を展開している主著の第七章、『外國貿易について』と題する箇所は、劈頭次の文言によつて論述が進められている。

「外國貿易の擴張は、決して即時には一国内の価値量を増加せしめるものではない。尤も、夫れは諸商品の數量の、従つて又、享樂品の總量の増加に貢獻する所甚だ強大であらうけれど。總ての外國財貨の価値は、それと引換に与えられるところの我國の土地及び勞働の生産物の數量に依つて測定されるものなるが故に、縦令新市場の發見により我國生産物の一定量と交換に外國財貨の二倍の數量を獲得するも、これに依つて吾々は毫もより大なる価値を取得せぬ筈である。」

又、他のところにおいて、

「凡ゆる商業の目的は、生産物を増加するにある」のであって、「外国貿易たると国内商業たるとを問わず、一切の商業の有利なのは、生産物の数量を増加せしめることによってであって、生産物の価値を増加せしめることによってではない」³⁾

ともいう。

それはなぜか。これに答えるものが、かの比較生産費説である。比較生産費説は、貿易は労働費用の比較差によって行われることを明らかにする理論であるが、これが論証のためにリカアオドの選んだ数例は、次の如くであった。

すなわち、イギリスもポルトガルも俱に羅紗と葡萄酒を生産し得るが、羅紗の生産には、イギリスでは一〇〇人、ポルトガルでは九〇人を要し、また葡萄酒の生産には、イギリスでは一二〇人、ポルトガルでは八〇人を要するものとする。かような場合に、イギリスにおける生産をば全く断念し、その生産に絶対的に勝るところのポルトガルにおいて二財貨共に生産することにはならない。いずれの国も、夫々、その比較的優越を有する産業に特化し、すなわち、イギリスは羅紗、ポルトガルは葡萄酒の生産に専念し、互に其の製品を輸出することになる。これが、つまり、外国貿易であって、かくして、羅紗の一単位と葡萄酒の一単位とが交換されることになる。この交換は、両国に対して、使用価値量の増加をもたらすことになる。何となれば、若し貿易が行われず二財貨俱に自国で生産しなければならぬとなると、イギリスにおいては、羅紗一単位の提供に対して葡萄酒100/120単位しか与えられず、又ポルトガにおいても、葡萄酒一単位で羅紗80/90単位しか獲得し得られないからである。

そこで、リカアオドは、貿易の利益を、財貨の数量、使用価値量の増加にもとめるといわれるのである。

この解釈に対して、赤松博士の如きは、リカアドオの理論ではもう一つの場合のあることを指摘する。

博士によると、前述の命題が当嵌まるのは、輸出でいうと、各国が其の生産物を自国の価値において輸出する場合である。価値以上に輸出して余剰利潤を獲得する場合は、これと異なる。この二つは、区別して考えられなければならない。リカアドオにおいても、外国貿易の開始によって、貿易産業に超過利潤の生ずることは、認められている。競争によって、資本が他の産業から充分にこの有利な産業に流入するまでの期間というものは、該産業に超過利潤が存在することになる。そこで、前の場合は単純労働と複雑労働とに還元されるものであるから、等価関係とみることが可能であり、従って本来、先進国が後進国を搾取しているのは後の場合であり、マルクスのいうごとく、「貧国がその交換によって利得する場合においてさえも」搾取が行われていると言われうる、という。

這般の関係を、直接に、リカアドオの著書について窺うこととしよう。

リカアドオが貿易によって超過利潤の発生する場合のあることを承認していることは、貿易の利益が那邊にあるかを規定した、前掲の彼の主著の第七章の劈頭の文言に続けて、次のように述べているところから明らかである。

「若し商人がイギリス財貨を一、〇〇〇磅だけ購入することに依って一定量の外国財貨を獲得し、而して之をイギリス市場において一、二〇〇磅で販売し得るものとせんか、商人はその資本を斯様に使用することによって二〇%の利潤を差げるであろう。だが、彼の利得も、将又輸入財貨の価値も、イギリス財貨と引換に取得される外国財貨の数量の多少によっては増減されないであろう。例えば、商人が葡萄酒二五樽輸入しようと五〇樽輸入

しようとして、一方の時には二五樽が、他の時には五〇樽が俱に等しく一、二〇〇磅で売却される限り、彼の利益には毫も影響があり得ない。何れの場合においても、彼の利潤は二〇磅、即ち彼の資本の二〇％に限定されるであろう。そうして又、何れの場合においても、同額の価値がイギリスに輸入されるであろう。もしも五〇樽が一、二〇〇磅以上に売れるならば、この商人個人の利潤が一般利潤率を超過し、従って、葡萄酒の価格の下落が総ての物を旧水準にまで引戻す迄は、資本は当然にこの有利な事業に流入するであろう。⁵⁾

又、『低廉な穀価の資本の利潤に及ぼす影響に関する一論』の中にも略同じような趣旨の記載がある。

「新なよりよい市場の発見者は競争が作用を及ぼすまでの暫くの間、特別利潤を獲得すであろうことを余は否定するものではない。彼は新市場を知らぬ者に較べれば、其の輸出する商品をより高い価格で販売するか、或は其の輸入する商品をより低廉に購買し得るであろう。彼或は数人の者が此の貿易に独占的に従事している間は、彼等の利潤は一般利潤の水準以上にあるであろう。併し乍ら吾々が茲に謂うは一般利潤率に就てあつて、少数の個々人の利潤に就てではない。而して斯かる貿易が一般に知られ追従されて来るに従つて、輸入国に於ける其の外貨の価格は、それが増加して豊富となり獲得容易となる結果下落し、其の販売が普通の利潤率しか生じないようになり——最初此の新貿易に従事せる少数者に依つて獲得された高い利潤は一般利潤率を高めざるのみか——彼等の利潤其のものが普通の水準にまで沈下するであろうことは疑い得ざるところである。」⁶⁾

輸出であろうと、輸入であろうと、貿易によつて、超過利潤の生ずる場合のあることを、リカアドオが認めていることは、如上の章句から明らかである。だが、この種の貿易による超過利潤の発生は、所詮は一時的、暫定的なものであると、リカアドオは観る。彼は、この間の関係を、機械の採用の場合になぞらえ、次のように説明する。

「其の影響たるや、国内に於ける改良機械の使用から起る影響とまさしく同様である。機械の使用が一人或は極めて少数の製造業者に局限せられている間は、彼等は特別利潤を獲得し得よう、蓋し彼等は其の商品を其の生産費より遙かに高き価格にて販売するを得るからである。——然し其の機械が全産業に一般となるや否や、其の商品の価格は現実の生産費にまで沈下し、普通、通常の利潤を残すのみとなるであらう。」

すなわち、この有利な貿易産業に他の産業から資本が流入する結果として、やがて其の超過利潤も消滅し、その価格は、輸入の場合は輸入原価に普通利潤を合計した価格に、輸出の場合には輸出品の価値、或は生産費乃至自然価格に落著くものとなる。ゆえに、貿易産業が、超過利潤を取得し得るのは、それまでの過渡的期間に限られることになる。

この点で、リカアドオの観るところは、アダム・スミスの論ずるところと、鋭く対立している。

アダム・スミスの理論では、外国貿易において收める多大の利潤は、其の国の一般利潤率の上昇をもたらすことになる。その理由とするところは、かような場合、その有利な事業に参加せんがため、他の諸用途から資本が抽出される結果、一般生産物の不足を生じ、これが物価を騰貴せしめ、延いて一般的に利潤を増加せしめる、というに在る。リカアドオにおいては、そうではない。彼に拠ると、凡ての場合において、外国財貨及び内国財貨に対する需要の合計は、一国の収入と資本とによって限定されているものである。そこで、一方の需要が増加すれば、他方の夫れは減少するという関係に立つ。従って、もし外国財貨の購入に一国の収入及び資本のより多くの割合が使用されるようになると、国内財貨の消費のためにはより少い割合が残される、ということになる。このことは所詮、国内財貨に対する需要の減少を意味する。既に需要にして減退せる以上、資本の抽出によって供

給が少なくなったからとて国内消費に充当される財貨の価格は騰貴することはないであろう。而も、他方、輸出産業、すなわち外国財貨との交換に使用するところの財貨を生産する産業の利潤は、競争の激化につれ、次第に下向するであろう。かようにして、リカードは、貿易が伸張するも、一般利潤率の上昇となるのではなくて、貿易産業の利潤は一時高率に達するとしても、速に普通水準にまで沈降することとなるであろう、と断ずる。

- (1) D. Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, Gonner's ed., London, 1929, p. 108.
- (2) *Ibid.*, p. 304.
- (3) *Ibid.*, p. 305.
- (4) 赤松要、国際貿易における不等価交換、経済研究、第一号、五頁。
- (5) Ricardo, *op. cit.*, pp. 108—109.
- (6) Ricardo, *An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock*, *Shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation: with Remarks on Mr. Malthus's two last Publications: "An Inquiry into the Nature and Progress of Rent;" and "The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn,"* 1815.
大川一司訳、リカードオ農業保護政策批判、岩波文庫、二六頁。
大川一司訳、前掲書、二六一—二七頁。

三、価値における輸出

リカードオにおいては、貿易品の価格は、窮極において輸出国の価値に帰著し、価値以上の販売も価値におけ

る販売に決著することになる。この均衡えの過渡期に、余剰利潤の發生することは、リカアドオ理論の承認するところであるが、リカアドオにおいては、搾取關係が成立するのは、輸出品についていうと、其の輸出品が価値以上に販売される場合にのみ限らるべきものであろうか。

この問題に応えるために、私は、次に進んで、その謂ゆる価値における輸出に対して検討を加えてみたいと思う。

価値における輸出といつても、二つに分けて考察する必要がある。というのは、リカアドオにおいては、これと交換に輸入される財貨が、一般財貨であるか、それとも食物其の他の労働者の生活必需品であるかによって、事情が異なってくるからである。

曩に掲げた、貿易は、財貨の数量、使用価値量の増加となるというリカアドオの命題は、一般財貨の場合についての立言である。その国の生産物と交換に輸入される財貨が、労働賃銀のそれにして費消されるところの労働者の食物其の他の生活必需品たる場合には、問題はしかく簡單ではない。前の場合は、財貨の数量、使用価値量の増加となるだけで、利潤率を騰貴させる何等の傾向をもたない。ところで、後の場合には、リカアドオ理論の必然の結果として、賃銀は下落し、資本の利潤は上昇することとなる。それでは、輸入財貨が労働賃銀のそれに対して費消されるところの労働者の食物其の他の生活必需品たる場合に限って、なぜそうなるのか。

周知のように、リカアドオは労働価値説の立場に立っている。彼においては、財貨の交換価値はその財貨の生産に必要な労働量によって定まり、この投下労働量によるその一定せる価値が分割されて賃銀と利潤となるものであって、決して賃銀と利潤とが個々別々に定まってそれから価値に合成されるものではないから、価値關係

的には、賃銀と利潤とは相反関係に立つことになる。すなわち、価値の中、賃銀として支払われる部分がより大となれば、利潤として支払われる部分がより小となり、反対の場合には反対の結果を生ずる、ことになる。

労働の生産物が賃銀と利潤とを支出し得る所以のものは、労働はそれ自体の価値以上の価値を作出し得る性質をもっているからである。賃銀は、謂わば、労働という一種の財貨——その生産物を生産した労働者に与えらるべき労働という特殊財貨の価値に外ならない。だから、これが生産に必要な労働の数量によって決定される生産物の価値の中から同じく労働の数量によって決定される労働の価値を差引いた残余の価値と、この労働の価値とは、逆比の関係に立たざるを得ないことになるわけである。だから、どうなるかというところ、「利潤を高く保つためには賃銀を低く保つ以外には方法はない¹⁾」ということになる。

ところで、この財貨の価値の一構成部分たる労働の賃銀の騰落を決定するものは何か。「労働は、売買され、且つ数量において増減され得る他の総ての事物と同様に、その自然価格と市場価格とを有する²⁾。」労働の自然価格とは、労働者をして、その生活を維持し、増減なくその種族を永続させるに必要な価格である。労働の市場価格とは、需要にたいする供給の自然的作用に由つて、労働にたいして実際に支払われるところの価格である。ゆえに、リカアドオは、貨幣価格に変動が無いものとすれば、賃銀の騰落を左右する原因として、次の二つのものを挙げる。

第一、労働者の供給と需要

第二、労働賃銀が費消されるところの諸財貨の価格

が是である³⁾。

市場において労働に対して実際に支払われるところの価格たる市場価格についていうならば、労働は稀少な時に高価で、豊富な時に低廉であることは謂うまでもない。だが、労働の市場価格がその自然価格から如何に外れることがありとするも、他の諸財貨と同様に、結局は自然価格に一致せんとする傾向を有するものである。リカアドの理論においては、労働の市場価格の自然価格からの乖離は、資本の蓄積、すなわち、労働雇傭手段の蓄積の遅速によるものである。この蓄積の速度は、労働の生産力によって決定されるものであって、彼に拠ると、労働の生産力は、肥沃な土地が豊富に存在する場合に最も大である。広袤万里の沃野をもっている新植民地においては、蓄積は極めて迅速であつて人口の増加を遙に凌駕するから、労働の市場価格はその自然価格より著しく騰貴することとなる。だが、この傾向も永くは継続され得ない。というのは、人口の増加につれ、耕作が品質の劣っている農地に拡張されざるを得ぬこととなつて、資本増加の速度が鈍つて来るからである。従つて、開拓後既に久しい歳月を経ている旧国においては、労働の市場価格はその自然価格に略一致していると観られ得る。

それでは、労働の自然価格は、如何にして定まるか。労働者が自分自身と労働者の員数を維持するに必要な家族とを扶養する力は、その賃銀として取得する貨幣額によるのではなくて、その貨幣が購買するところの習慣上彼にとつて必要欠くべからざるものとなつてゐる食物、必需品等の数量に依存するものである。労働者は自分自身とその家族を維持するためには、習慣上必要欠くことの出来ないものとなつてゐる一定数量の食物と生活の必需品等を購入・消費しなければならない。リカアドは、労働賃銀が費消される諸財貨のうち最大部分を占めるところのものは食物であつて、また食物以外の必要物は殆ど無際限に之を増加し得べきが故に、労働の自然価格の騰落は専ら食物によつて左右されるものとなす。すなわち、労働の自然価格は、食物価格が騰貴すれば騰貴し、

下落すれば下落するとなす。賃銀の下降は、すなわち利潤の上昇である。ゆえに外国から低廉な食物を輸入すると、必然的に其の国の一般利潤率は昂騰する結果となる。

元來、リカアドオの経済学は、分配の経済学である。土地の生産物の社会の諸階級に対する分配を規定する諸法則を究明するところの経済学である。すなわち、地代、利潤及び賃銀の名称の下に、地主、資本家及び労働者の三者に対する勤勞の生産物の分割を決定する諸法則を定立する経済学である。これがために、彼は、地代、利潤及び賃銀の価値關係的な関連を明らかにすると共に、社会の發展につれ、この三者が如何なる運動を示すか、別言すれば、この三者の『自然的行程』natural course は如何なるものであるかを追究する。リカアドオの研究は、次のような結論を示す。

リカアドオにおいては、地代は等量の資本と労働とを投下することに依つて獲られる收穫の差額であり、收穫物の価値の差額である。社会が發展し、富と人口が増加するときは、ますます多量の食物が必要となる。豊饒にして便利な位置を占めている土地が、増殖する人口にたいする食物生産のため必要とされる程度以上に遙に豊富に存在するか、或は資本および労働が旧土地にたいして些の減収をも見ることなしに無制限に投下することが可能とされるならば、地代および地代の騰貴なるものはあり得ない。ところが、実際において、土地は、有限にして、品質に差等あり、位置の如何によつて大いに利便を異にしている。また、土地には收穫減の法則が作用する。従つて、社会の發展上、最も肥沃にして且つ最も有利な位置を占める土地が先ず最初に耕作されるが、富や人口の増加にもとずく食物の不足が、次第に品質及び位置の劣る土地に耕作を拡張することを余義なくし、地代の發生及び騰貴を導くことになる。ゆえに、地代の自然的行程は、上昇の傾向を辿るものといわなければならない。

同じことが、賃銀に対しても当嵌まる。地代を騰貴せしめる其の同じ原因、同一の比例的労働量でもって追加量の食物を供給することの困難の増大は、食物の価格を不断に騰貴させ、従つてまた、賃銀を昂騰せしめることになる。だから、労働の賃銀の自然的傾向は、地代と同様に、騰貴にあるということになる。尤も、リカアドオは、賃銀の騰貴と地代の騰貴との間には、本質的な差異のあることを指摘する。それはなぜか。社会の発展につれ、食物の生産により多くの労働を要することとなつて、穀物の価格は不断に騰貴し、労働の賃銀も上騰することになるが、リカアドオは、賃銀全体としてのその上騰の割合は、穀物の騰貴に及ばないものと観る。そこで、穀物が高價となるにつれ、労働者はより多くの貨幣賃銀を取得するも、穀物賃銀は、従つて又、彼の支配し得る生産物の数量は、実はこれによつて寧ろ減少することになる。すなわち、その実質賃銀は低下し、境遇は悪化することになる。地代の騰貴は、これと大いに趣を異にする。穀物生産の困難が穀物の交換価値を高め、穀物の一定量は他の財貨のより大なる数量を獲得せしめることになるから、地代の場合には、地主は、これによつて、先ず第一に、その取得する分前が増大し、第二に、その取得物の一単位は以前よりもより大なる数量の他の財貨を支配し得ることとなつて、二重の利得をする。

資本の利潤の自然行程はどうか。曩に考察したように、社会の発展につれ、食物の追加量はますます多量の労働を犠牲にすることなくして取得され得なくなつて、賃銀は次第に騰貴することになる。ところで、賃銀と利潤とは、相反関係にあるから、このことからして、利潤は自然に下降の傾向を辿らざるを得ないことになる。

以上は、社会の発展にもとづく地代、賃銀、利潤の運動の動向である。リカアドオは、この動向の究明に、その学的生涯を捧げた。リカアドオの経済学は、社会発展のこの必然の過程を追究する経済学である。

之を要するに、リカアドオに拠ると、農業技術の改良や新市場の発見がない限り、社会の発展による富の増進、人口の増加につれ、事物自然の成行として、地代と賃銀は上騰し、逆に利潤は低落の一途を辿るの余義なきに至る。但し、賃銀については、この場合に、騰貴するのは名目賃銀に過ぎず、実質賃銀は騰貴ではなく下落するものなることは、前に述べたとおりである。だから、社会の発展が一定限度に達すると、資本の蓄積は終熄を告げ、従つて追加労働は全く需要されることなく、労働の実質賃銀は労働者が生存を維持するその最低限にまで押下げられ、人口は飽和点に達し、社会は停顿静止の状態に陥り、沈滞と惰性と無気力の支配する世の中となる。

資本主義社会は、リカアドオにとって、唯一絶対の社会であるとしても、それは、決して、生々潑刺、無限に進歩向上を続けてゆくものではない。資本主義社会は、彼にとつても、一個の活物であつて、生長し、発展し、やがて老衰する運命を荷っている。だが、このことは、老衰を防止する方法の絶無であることを意味するものではない。科学や医術の進歩が人寿を延ばし、疾病を治癒して再び清新の氣をとり戻させ得る如く、資本主義社会の沈滞萎縮を防ぎ、進歩と繁栄とを持續或は促進させ、永く生氣を保たせることが不可能ではない、とリカアドオは考へる。その方法の一つは、低廉な食物を海外から獲得することである。

資本主義社会は、資本に依存する社会である。リカアドオは、資本が急速に増加されつつあることは、この社会が進歩発展の過程にある明確な証左である、となす。而して、資本蓄積の速度は利潤率によつて定まるものなるがゆえに、資本主義社会が生々發展するためには、利潤が大であることを先決要件とする。その方法の一つが、すなわち、食物を低廉に入手するに在る。この場合は、それは独り資本の所有者にとつてのみ利益なのではない。一般消費者が食物の價格の低下によつて恩恵を受けることは勿論であるが、労働者と雖も、この場合、なる程貨

幣貨銀は下落することにはなるが、前述の理法から実質貨銀は上昇することとなって、彼等の境遇は好転することとなる。かようにして、リカアドオは、海外から低廉な食物を入手する場合、地主以外の総ての人達が、これによって利益を受けることを明らかにする。⁴⁾

- (1) Ricardo, *On Protection to Agriculture*, 1822. 大川一司訳、前掲書、八三頁。
- (2) Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, p. 71.
- (3) *Ibid.*, p. 75.
- (4) 拙稿、リカアドオと経済政策、法と経済、第一〇八・一〇九号、所載

四、結 語

上述のところから明らかであるように、一口に価値における輸出と云っても、リカアドオの理論においては、二つの場合が区別されている。それと交換に輸入される財貨が、労働者の食物ならびに生活必需品たる場合と、そうでない一般財貨の場合とが是である。前者の財貨、なかならず、食物の場合には、その限りにおいて、その国の一般利潤率の昂騰となり、従って、低廉な食物の輸入が継続する限り、『一時的に』ではなく、恒久的に余剰利潤の成立を見ることとなる。

だから、搾取関係は輸出品が価値以上に販売される場合に限らるべきだという観方は、当を得ていないということになる。従って又、資本主義の初期には、輸出競争が不完全であったから価値以上の輸出が行われ、余剰利潤が成立し搾取関係を認め得たが、資本主義の発展による競争の徹底化はこの高利潤を消滅せしめるものである

から、搾取の問題はどちらかと云えば資本主義発展の前段階的性格をもっているということも、全く根拠がない。リカアドオの理論では、価値以上の輸出は例外的な現象でしかない。のみならず、この場合と、価値における輸出ではあるがそれと引換に食物が輸入される場合とでは、其の効果は同日に論ずることはできない。前者の場合には、一時的に、而も当該輸出産業にのみ、余剰利潤の成立を見るに過ぎない。之に反して、後の場合は、永続的に、而も其の国の総ての産業に亘って、利潤が一斉に上昇することとなる。ゆえに、リカアドオが真に問題とするのは、この価値以上の輸出についてはない。

其の国の輸出品と交換に輸入される財貨が、食物である時は、其の国はこれによって萎靡と沈滞から脱却して再び生色を取りもどし、生々發展を遂げ得ることになる。そこにこの種貿易の重大な意義があり、そうしてまた當にそれゆえにこそ資本主義社会の成熟期の問題たり得るのである。

産業先進国は専ら工業製品を輸出し、これにたいして、産業後進国は食料品や原料品を輸出する。この貿易は、上述の理法からして、先進国にとって甚しく有利となるが、後進国にとっては逆の現象が現われざるを得ぬこととなる。このことは、とりもなおさず、工業国が農業国の犠牲において利得することを意味するものであって、この貿易を通じて優位産業国による劣位産業国の搾取が成立することは、リカアドオ理論そのものから論証することができる。¹⁾

(1) 拙著、リカアドオ貿易論の研究、一八五—二一八頁、